

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第9回）「体力の向上」部会 会議録

開催日時	平成22年4月23日(金) 午後3時04分～午後3時47分	
会場	練馬区役所本庁舎11階 1102会議室	
出席者	委員	米津光治、中村 隆、宮野いずみ、工藤智昭、田中泰明、畑 陽子 (敬称略)
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事

1 挨拶

アドバイザー

昨年は、12月を過ぎにいろいろ作業も進んだが、今年度は10月には完成原稿をお渡しすることです。昨年度よりも多少タイトになる。よろしくお願いします。

2 協議

事務局

体力の部会については課題が明らかである。指導課長の話の中で、練馬の子どもたちの実態を考えたときに、その実態あるいは課題についてのプログラムになるようなカリキュラム。

この子どもたちがこのことに課題があるのだから、こんなふうに克服させたいというカリキュラム。その指導と子どもたちに持たせる資料、あるいはワークシートを開発していきたい。

方向性の話については、本当に我々もゼロから始めているので、何が何だかという部分はあった。今年度は「先生方に作っていただきたいのはこれ」「事務局はこれ」ということで、相当明らかというか区分はしている。しかも体力部会に関してはこの最後、育成カリキュラムというかたちでそれぞれⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期において課題は何であり、課題改善の視点はこれだということまで踏み込んでいっているので作りやすい。

学校行事、クラブ・部活動や健康を保持増進するための知識や理解の部分。このあたりをどのように膨らませるかというところがある。また逆に食育を意識しすぎないようにしたほうがやりやすいと思う。

一つひとつ保健の授業でやらなければいけないことをきちっとやっていただく。それを補完するかたちの特設の学活があったり、特設の総合があったり、例えばそれにかかわる道徳の時間の資料をご提案いただく。そのように考え進めたいと思う。

(次回の日程調整、参考資料図書の説明)

アドバイザー

プロットのところで確認。先ほどの事務局先生の説明で、各部会70ページ程度、そのうちの1、2、3については事務局で作成するということですから、具体的に指導案とワークシートを純粋にこの部会でだいたい何ページぐらいを考えているのか。

事務局

今考えているのは、この1、2、3で4ページ程度。

できるだけ先生方のアイデア、学習指導案を優先したほうがいいと思っている。ページ数が増える分については対応可能。

アドバイザー

それからもう一つ。資料の4がわかりやすいのだが、学校サイドは、体力向上部会の中でこの位置になるかどうかはちょっとわかりませんが、とりあえず今、横の項目としては教科から始まって六つある。縦に学年が九つあるが、一応このマスに何かしらの指導案とかワークシートが埋まることが望ましいの。望ましいというか、その方向で進めたほうがいいのだが。

事務局

今、二つ案を持っている。皆さんからいただいた案をここに落とし込む。四つ合わせれば埋まる。それからもう一つは、部会によっては自分たちのカリキュラムとして立ててみたい。お手元に中間報告書を持っていれば、中間報告書のキャリア部会に、折込みのものがある。折込みのところにあるように、キャリアの部会はいろいろなアイデアを出している。だが、事例として出しているのは、四角囲みの部分。この部分は事例というかたちになるので、この二つのどちらかというイメージ。できるだけ先生たちに無理してほしくない。

アドバイザー

個人的に今日、吉村課長の話や、事務局統括の話聞いていて、特に体力向上というのは保健体育が中心になり、その中で子どもたちにどうやって運動させて体力を向上させることが、当たり前だけれどそこが中核にはなっていくのだろうと思う。しかしそうは言っても、栄養とか睡眠とか休養みたいなことを運動等のかかわりの中で考えていくのだと、やはり学級活動の中でも指導も、どこかの学年ではちゃんとやらなくてははいけない。先ほど食育という話があったが、これも前回この部会で話したように、体を動かすだけではなくて知的な理解みたいなこともバックボーンとしてないと、生涯に渡っての体力作りということにはならない。

そういう意味で、課題は明確だが、最初から課題解決のためだけの方策になると偏ったものになる心配がある。

事務局

フリーにお話ししていただきたい。

委員

資料5の指導案(案)。それからワークシート(案)。これ、実践は必要か。実践はどの程度。

例えば指導案を立てたときに、普通はやってみないと、修正をしないと実際に載せられない部分もあるし、ワークシートも実際にやってみて修正をしていかないと提供できるものにならない。その点、どう進めていくのか。

事務局

これについては、考えていただいて実践していただければありがたい。机上の空論ではというところがあるので、先生たちも生み出した責任という気持ちを感じられると思うの。ただ、各学校の年間指導計画がある中で、あまりにもはみ出してまでというところは厳しい。

委員

一番考えているのは、中間の、真ん中のところの接合の部分でこうやって指導案を立てたと。それが本当に効果的だったかとかいう検証は、一般には実際に普通の学校ではできない。

アドバイザー

できない。

委員

例えば小学校、中学校と別々にやり、「それぞれの効果はこうだからこういうことが予想される」とかしかできないと思う。そこがメインになるというのが去年の話だったと思う。

小学校は、実践例とか体育部があるので、ある程度予想がつく。中学校もあると思う。その結合部分のところをメインと思った。そこがうまくいかない資料は出したけれどできないということになったら困る。そこをどうしていくのが課題でそこを検討していく必要があると思う。

アドバイザー

これから初めてやる小中一貫の中で何もないところ、学校がばらばらになる中で、区として一つの参考資料を作るわけ。それに基づいてやってみようとしたが、不都合があるということであれば、修正とか改善に向けていく一つの資料になる。

そこは、検証することも現実的には無理なので、それぞれの先生方がオリジナルで、これが今のところではいいと考えるものであれば、それでよしとしていいのではないかと。

事務局

2校目については基本方針ででている。だが、これは時間をかけてやるものなので、今年検討して、来年できるというものでもない。おそらく学習指導要領の変遷を考えると、プログラムというカリキュラム自体は修正が必要なのだと。

アドバイザー

練馬は学校数が多いから、現場の先生方がこの委員会とは全然違うところで実践したいもの、また、今度蓄積されていくこともあるので、この年はこれでよいかと。

委員

例えば体育の時間だけでクリアするというのは基本的に無理。そうすると体育の授業では、レポートのように例示とかやり方を教えておいて、基本的に体力向上というのは、休み時間とか放課後、土日で子どもたちが身につけた遊びの中でしかできない。例えば、体育の授業でち

よっとやったからといって体力なんて絶対付かない。授業の中で付けるという考え方なのか。指導案があると授業の中で作れという話だけれど、そんなのは本当に無理な話。

それから、学年によって発達段階が違うので、この時期ではこういうものがない、この時期ではこういうものがないと、9年間通して考えるわけ。そうすると、それぞれの小学校とか中学校で必ずやっている、学年によって強化しているようなことがあるので、体育部で吸い上げてやると比較的早くできるのではないかなと思っている。

事務局

遊びの部分は、学校の外で体力向上とかを補強する部分だと。あとは子どもにとっては実践部分。だけど、そこまではちょっと厳しい。

担当指導主事も、「学習指導案」となると「授業」になるというイメージがあるので、先ほど全体会でも体力の向上部会の呼び方は難しいと思っている。吸い上げていただけるのは本当にありがたいが、日常生活の遊びの部分というのは難しい。

委員

例えば、投力とかは、授業の中でやって付くかといったら付かない。休み時間にドッジボールをやったり、木に登ったり、鉄棒をやったり、そういうことでつく。だから小学校の体育は学び方を学ばせるのが主だから、その場で直接はねらっていないわけじゃない。そういう運動経験をさせ、自分の日常化にすることで体力が付く。いかに子どもたち一人ひとりにこういう学び方を教えるかというのが、長い目だけれども本当は近い。45分の授業をやり、さあ使用前・使用後で伸びたかということはあり得ない。指導案でそこを直接ねらって伸びるのかといったら、それはちょっといかなものかなと思う。

子どもにこういう運動をするとこういうふうになるとか教えて、授業でもやるけれども、遊びや日常的につなげることによってその授業の中でまた取り入れて、相互作用だと思っている。そういう考え方の授業の組み立てでよければ、何か学び方を学ばせて、もちろん体育の授業でもやるけれども、運動会もあるし、体育的な業間体育もあるし、それから遊びもあるし。そういうことを全部総合的に考えて学校が取り組むのであれば体力というのは付くと思う。

事務局

もともとのプログラムは、体育の授業だけというふうには限定していない。

委員

この表をまとめるのは非常に苦勞されたのだろうと思って見させていただいた。小中一貫校については、実際に私は目に触れたことがないので、話を聞いたところだけしかイメージがないのですが、この作成委員会がねらっているものというのは、体力向上だけを考えていくと、結局、技能のみで言っているのだろうかなと思っている。

実際に小中一貫校に入ったならば、小学校の体育と中学校の体育がどのような連携を図って授業をしていくのかが見どころだと思う。委員校長先生が言われたように、小学校体育は学び方を中心にして、いかに技能を伸ばしていくところがあり、中学校の体育のほうはよく分かからないが小中一貫校はそこがうまく調整されていくのがよさなのかなと私は思っている。そう

いう話し合いが去年あったのかどうかということ。

この指導案を作れと言われてすごく困るのが、何を作ればいいのかということ。ここに書かれている各運動、「体を移動する運動遊び」などあるが、すべて網羅させていく、それとも、どこかに書かれている気がするが、第Ⅱ期を中心にして指導案を作っていくのか。そういうイメージが私はまったく分からない。

課題があり、ではその課題を克服しようという方向で、イメージがまったくわからないので、教えていただきたい。今のところまったくイメージがわからない。

事務局

この一覧のページの前のページに、部会でご検討した、「目指す子どもの姿」というのがある。

体力の向上の部会は、ある意味Ⅱ期の部分にはこういう特性があって、例えば思春期には体力差とか性差とかがあるので、中学校1年生にかけてはという部分に踏み込んでいる。これは小学校6年で終わっていない、中学校は中1から始まるわけではないというところを改めて皆さんが分かっていることを文字にしている。

委員

中学校との連携については、去年随分話して、やはり一番、第Ⅱ期のところ、これをどうしていくかというところがすごく話し合いでは出たところ。ここが小中一貫のメインとなるところということで、特に6年生と中1あたりも部活動も含めて指導等の違い、小学校と中学校との違いがあったのを一緒にするというところでどうしていくかということ。体の発達段階だとか指導内容がガラッと今変わっている状況があるので、そのあたりをどういうふうに連携させていくかということが一つあった。

それから指導案の内容だが、委員先生からもあったのだが、授業は当然、ここは体づくり運動を重点化したのは、運動の日常化というところをメインにしたいと。体力向上というのは、委員先生が言ったように、授業をやったから付くものではなくてやはり日常化が必要だろうということで、それをメインとした授業提案みたいなものをする事で運動の日常化を図っていく。ただし、練馬区としての体力の課題が4つ挙げられているので、それを克服していくための体づくり運動、それから授業提案ができれば、練馬区としての体力向上の課題を解決していけるだろうということが基本的にある。

それからもう一つは、第Ⅰ期から第Ⅲ期まで、要するに1年生から中3までを見通した体力向上の提案として体づくり運動を系統立ててやることでできるのではないかとということで去年話をして、こういう抜粋をした。

ただ、これがすべていいかということではない。指導案と先ほどあったが、これからどういうところに視点を当てて資料を作っていくのかというのはやはり話し合っていく課題。

だから、技能だけではなくてメンタル面、知識理解のところでもそれをリンクさせていかなければならないので、こういうまとめ方になった。授業で体力を向上させるのではなくて、授業を契機に日常化してやるための授業提案、その資料作りという位置付け。それからクラブ活動、学校行事、先ほど言われたように部活動、それから知識理解の部分、食育、そのあたりも含めた総合的な体力向上を目指したカリキュラム案の指導をこれから少し分散して作っていくということ。

だから理念というのは、去年はそこまでのところをまとめたので、それをこれから分担し、さらに細かい資料作りや授業提案の案を作っていくということ。委員先生が言ったように、ではこれからどこに視点を当ててどういうところが課題だからどういう資料を作っていくかというのをこれから話し合って検討していかなければいけない。

自分としては、やはり第Ⅱ期のあたりが一番の重要ポイントかなと。要するに、Ⅰ期とⅢ期は、中学校とか小学校には蓄積されたものがある。1年から4年と、中2、中3。だから第Ⅱ期の部分でどういう課題があって、またどういう資料を作っていくことで桜小中がうまく体力向上に取り組めていくかというところを話し合って資料作りをするということが課題なのかと。

委員

去年1年間勉強して非常に印象に残っているのが、4月の最初に米津先生が言っていた、小学校と中学校がお互い分野を分けるのではなくて、お互い近付いていこうということで、小学校のいいところ、中学校のいいところを取り上げ、最終的にここのⅡ期、6年生から中1ギャップがうまく交わっていければということ、念頭においてこの会議に参加している。

本年度も、今先生が言ったように、5、6年生と中1のⅡ期が一番のメインになると思う。ただ、今年どういうことを実践例ではっきり挙げてやっていくのかということがまだ少し見えていなので、5月の頭にすぐに話し合いをし、検討をしていきたいと考えている。

委員

確かにⅡ期のところは、小中一貫となるとここがやはり一番メインだと思うのだが、体力の課題というところを解決するプログラムと言うと、Ⅰ期でやっておかなければいけないことという、そのつながりはすごくある。

そういう部分で、Ⅰ期で押さえていくところとか、例えば投力にしても、そこでやりⅡ期につなげていくというのがあると思う。

委員

(該当校の) 難波先生がいればまた具体的な話や、現場の先生が実際に欲していること。どんなことが、来年やるにあたって体育関係、体力向上でほしいのか。そういう情報があればこちらで検討できるの。やはり現場の先生が子どもを見て実際にどんな資料がほしいとか、どんなことを指導で困っているかが分かると、組みやすい。それだけではないと思う。

委員

いつも疑問に思うのは、小中連携というところで、先ほど言われた中1ギャップの話もそうなのだが、やっていることが違うから早めに小学校に下ろせという考え方なのか。というふうにすごく思う。例えば部活動を早めにしていくとかいうのが小中一貫のねらいなのかというのが、私はよく分からない。

アドバイザー

それは違う。

委員

逆の視点はないのかなと思うのだが。

事務局

私はむしろ中学校がもっと近付かないといけないかなと。小学校のゴールというのはあるはず。中学校のスタートというのもあるのだが、そこにはちょっと差があるように思う。

自分が学校にいたときに体育の教諭と議論になったのは、まず何をやるかといったら体育着の着こなしから始めると言うから、体育着の着こなしは体育じゃないでしょうと。それは生活指導でしょうということとか。

委員

全科と専科で違うと思っている。小学校体育までは全科の先生がやっている。中学に行くと専科の先生。ある意味、教科の専門性が出てくるので、ガラッと変わってくるのがやはりギャップがあると思っている。

アドバイザー

やはり大きい。義務教育9年間と言いながらも6年間、3年間の教え方とか学校のシステムとか、それから学ぶ内容、量についてもまったく違う。そのギャップについては9年間の中でなんとか接続できないかということが一つはあるだろう。

もう一つは指導の中身として、小学校の先生方はこの小学校で身に付けた力が中学でどう育っていくのか。中学校の先生からすると、子どもたちは今これだけ力を付けているのだけれど、小学校でどんな指導を受けてきたのと。ここの部分については今まであまりなかった。

例えば中学校の先生が本当に小学校に行って、体育の先生が小学校の子どもを指導する、これも一つの方法だと思うが、それと、こういう指導資料の中に、小学校段階でI期にはどんなことを指導しているのだろうということが、少なくとも中学の先生の目に触れる。あるいは小学校の先生が中学校の先生の学習の内容とか指導法について目に触れる。ここはものすごく大きなこと。

事務局

先ほどの委員の疑問については答えになる部分もあったと思う。教育課程の特例校に指定するわけでもないのに、小学校でやるべきこと、中学校でやるべきことというのはある。